

王の血

東洋コッペ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呪いの王 両面宿儺の血を引く術師の話。

加茂家が生んだ怪物はどこを指すのか。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
32	21	15	6	1

第1話

男は術式を使えなかった。

呪術界御三家と呼ばれる、加茂家の一族であり現当主の弟でありながらだ。

「なぜ、呪力はあるのに赤血操術が使えない!!赤血操術どころか術式すら、」

男は術式を使わずとも兄を越えるため日々訓練に励んでいたが、一向に強くならなかった。

「私には才能がないのか?」

いくら、現当主の弟だからと言って、術式が使えないものは冷遇される。

力を追い求めた男であったが、いつしか諦め絶望していた。

しかし、男は考え思いつく。

「私ではなく、私の子を加茂家歴代最強にする」

そうと決まれば、妻を探さなければならぬと男はより良い血筋の女を探した。圧倒

的な力を持って産まれる可能性がある血を引いていなければならない。

そして見つけた。

呪いの王の血を引いている可能性のある女を。

女は呪いの王の血を引いている可能性はあったが、なんせ1000年前の血であり非常に薄くなっている上に信憑性もあまりなかった。

あの呪いの王が子を作っていたのか定かではなかったが、可能性に賭けてみる価値はあった。

男は腐っても加茂家であり、ダメであればまた別の女で子を作れば良いと考えていたからだ。

己の野望の為に狂気に取り憑かれていた男は、無理矢理女を嫁がせ子を作った。

しかし、子が産まれる時、男と女に異変が起きた。

男は術式を使えなかったのではなかったのだ。生涯で一度だけ、子供が産まれる際に発動する術式だったのだ。

子の持つ血の最大限の力を引き出す術式『血統操術』

しかし、最大限の力を引き出す代わりに、余りにも大きな代償を払う事になる。

男と女の命

この2つの命を対価に、この世に呪いの王 両面宿儺の力を継承した新たな命が誕生した。

子の名を「加茂 猛」（かも たける）

産まれたばかりだと言うのに、圧倒的な呪力量。

先日産まれた「五条 悟」と同様この世界の均衡を崩す存在。

目は紅く、髪は金色。まるで鬼神を思わせる風貌の赤子を、みな恐れていたが、現当主が育てる事にした。

弟にどれだけ憎まれてようが、兄は弟を愛していたのだ。

弟の悲願でもある加茂家歴代最強の男にするべく、己の全てをかけてこの子を育て上げると誓った。

猛が6歳になる頃には、加茂家の誰よりも強くなっていた。

毎日の厳しい訓練、呪霊の討伐により、着実に力をつけていた。

「俺様に勝てる奴などいるのか？ 雑魚ばかりで張り合いがなさすぎる。」

「猛様。」

猛の周りには加茂家の精鋭隊が10名ほど倒れていた。

猛の圧倒的なフィジカル、呪力量、そして両面宿儺と同じと言われる術式により誰も手も足もでなくなっていた。

「俺様は既に呪術界最強なのでは？」

ゴーーーーーン!!!

「いつつつつ!!!」

「バカタレが!!潜在能力ばかり頼りにして、技術が全く追いついとらん!!呪力操作、体術どれも全然ダメだ!!!」

「わかってるけどよお、技術が無くても既に俺様に敵はいねえじゃあねえか!」

「ほう、そこまで言うのであれば、あの五条悟と戦ってみるか?」

「五条悟?五条家の天才だっけか?あんな奴より俺様のが強いに決まっている。」

「いいだろう、五条家に試合との交渉をしてきてやろう。それで五条悟を見て判断してみろ。」

「やってやろうじゃねえか。叩き潰してやるよ!」

第2話

五条悟

六眼と無下限呪術を兼ね備えており、猛と同様世界の均衡を崩す存在である。また、この男も産まれながらに特別な存在であり、強さに絶対なる自信を持っていた。

「加茂家の雑魚と試合？俺が勝つに決まっているのに？」

悟は、自分は特別な存在であり負けるわけがないと疑いもしなかった。事実、産まれて一度も敗北を味わった事はないのである。

「加茂家にも、特別と呼ばれる悟と同じ歳の子が存在するらしいのだ。一度会って戦ってみなさい。」

五条家は悟に更に強くなってもらうために、加茂家からの試合の誘いを受けようと考えていた。

「まあ、いいけど。ちょっとはやるやつなんだろうな？」

「噂ではな。」

五条家・加茂家の両家の神童でもあり、問題児の2人が初めて顔を合わす事となる。

――試合当日

「加茂家の皆様、ようこそいらっしやいました。本日はどうぞよろしくお願い致します。」

「今回のお話をお受けいただきありがとうございます。また、わざわざお出迎えまでして頂き。」

両家現当主共に、お互いの家の力を見てやろうとの魂胆もあつた。

だが、それ以上に両家に産まれた神童達の力を見てみたい。また、どのような力を持つているのか把握をしておかなければならないと考えていた。

ーゾクッ

(こいつが加茂猛?!なんて呪力量だ!本当に同い年か!?)

(こいつが五条悟?!不思議な目をしてやがる、なるほど親父が会わせたがるだけある)

お互いに見ただけで、特別な存在であり自分と互角の力を持つているかもしれないと感じ取っていた。

「では、加茂家の皆様こちらへどうぞ。試合の会場へご案内致します。」

「ありがとうございます。悟様本日はうちの猛が胸を借りさせていただきます。」

「……………はい。」

この時お互い、どうやって相手を倒すかしか考えていなかった。

——会場に到着するや否や早速試合が始まろうとしていた。

加茂家

呪いの王の血を引くとされる加茂猛

五条家

六眼と無下限呪術を併せ持つ五条悟

両家の神童はお互いに喋らず、ジツとお互いの力量を図ろうとしていた。

「ルールは2つだけ！殺さないこと。そして後遺症の残る怪我をさせないこと。どちらかが気絶または、まいったと言った時点で試合は終了とする。また、危険であると判断した場合、審判であるこの私が止めさせていただく。今回は殺し合いではなく、試合だという事を忘れるな。」

ーそれでは始め!!!

ドン!!!

始まると同時に轟音がした。猛が全速力で殴りかかりに行っていた。もちろん呪力も全力で込めて。

(こいつには、最初から全力でいく!!!)

だがしかし、五条悟には通用しない。彼の術式によって現実化させた無限により拳は届かない。

「なんだこれは!!!」

「あつぶねー!いきなりかよー!これは俺の術式によつて生まれた無限。お前の攻撃はいくらやつても届かないよ。」

無限というものを初めて体験した猛は驚愕した。初めて自分の攻撃が通じない人間がいたと。

「ほう、貴様の無限とやらは攻撃が届かないと。しかし、無限はいつまでも続くのかな？」

「なっ!!」

ドドドドドドドド!!!

殴る蹴るのラツシュである。只のラツシュではない、猛の呪力とフィジカルを存分に活かした破壊力抜群のラツシュである。

(チツ！コイツのラツシュが早く重すぎて無限に集中させられる！だか、)

悟が消えたと思ったら、猛の真横にいた。そして呪力の籠った拳を振りかぶっていた。だが、猛は反応した。

(消えた!!!)

「おらあ!!」

「くっ!」

(今のを避けるのかよ!!)

開始早々の圧倒的な力のぶつかり合いに両家共に驚愕していた。これほどとは。当人達はおもちゃを見つけたような嬉しそうに笑っていた。

「貴様強いな！褒めてやる！これから俺様も術式を使い、貴様を完膚なきまでに叩きのめしてやる！」

「お前、俺様とか使ってるの？お前の攻撃は効かないし、まずはお前の術式を見極めてやるよ!!」

『解』

ズバ!!!!

あらゆる物を切り裂く斬撃を、猛は繰り出す。しかし、悟の無限がある限り悟には届かない。

「だから、効かないって言うてんだろ！」

(斬撃を飛ばす術式か？さっきの攻撃といい、なんて強い力だ)

ゾクッ

今まで見たことも無いような狂気に満ちた笑顔をした猛がそこにはいた。

「貴様は無限とやらを意識し過ぎると、余計に力を使っているな？俺様の斬撃を耐えるには全力で無限とやらを意識せねばならないとみた。これから貴様が力を使い果たすまで斬撃を喰らわせてやる！俺の呪力が無くなるのが先か貴様の呪力が無くなるのが先か。試してやる!!」

『解』

ーバツバツバツバツバツ

!!!!!!!

「ぐっ!!!」

100発以上の斬撃を喰らいつつも、悟は無限を保ち続けた。

時間にして僅か5分にも満たないが、両者ともに力を使い続け、鼻血は出、尋常ではない汗をかいていた。

(クソがー!!)

お互いの高いプライドにより続けられていたこの攻防にも突然終わりがやってくる。

「試合終了!!!!これ以上は危険と見なす!!!」

そう、両家の当主はこれ以上はどちらかが死ぬ可能性があるかと判断して試合を終わらせたのである。

「ゼエゼエ、俺はまだまだ余裕だったが、そういう事ならしようがねえな。」

「ハツハツ、俺様は後1、000発は斬撃を放てたが、貴様をここで殺してしまってもな。」

「なんだと!!!」

「猛!!!もう終わりだ!!帰るぞ!!!」

「ちっ。次は余裕で倒す。」

「いつでもかかってこい。」

また、始まりそうになっていたが加茂家当主の一括により猛は連れて帰られた。

猛にとって初めての対等に戦える相手との出会いで、稽古、呪霊討伐にもより一層励

むこととなる。

第3話

―もつと力が欲しい

五条悟との試合後、猛は人が変わったように強さをより求めるようになった。自分と並ぶ存在というものが許せないのだ。強さという点において、必ずや頂点に立たなければならぬと、理由もなく感じていた。

両面宿儺の血、今はなき実の父の強さへの渴望がそうさせているのかもしれない。

加茂家の英才教育により、呪力操作、体術は飛躍的に伸びていた。猛は天才でありスポンジのように吸収していく為、もはや、教えられる者などいなくなっていた。加茂家から教わる事がないとみるや、ボクシング、柔術、総合格闘技などありとあらゆる格闘技も学んだ。

しかし、五条悟との試合はあの一戦以降行われる事はなかった。

両家共に、次期当主となる者の力を隠したかった。また、試合を行うと非常に周りに

被害が出てしまうことを危惧していた。

五条悟を打ちのめす為に、鍛えてきた猛であったが戦う機会を得られずストレスを感じ、発散するために、呪霊を惨殺する事は日常になりつつあった。

119年後

いつものように、鍛えた技と力を試す為に呪霊を惨殺しようと、とある樹海に任務へ出かけた猛であったがいつもと様子が違うことに気がついた。

ズズズズ

「ん？なにか特別な力を感じる……。あつちか!？」

尋常ではないスピードで、特別な力を感じる方へ向かうと、待ち構えていたのは、身長3mほどで身体中に黒い刺青のような物が入っている紅い烏天狗であった。

「なるほど、貴様がここの主というわけか!」

「いかにも。あなたが今噂になっている加茂猛ですね?」

会話の出来る呪霊？

猛にとつて、初めて会話の出来る呪霊であり非常に興味をもった。

「話の出来る呪霊か！おもしろい……。俺様が噂になつてゐるだど？呪霊の中でまで有名になつてしまつたか！」

大手を広げニヤつく猛に対し、憤怒の表情を浮かべてゐる烏天狗。

「同胞を尋常ではない数祓つてゐる、憎き呪術師だと噂を聞いていますよ。ここで、同胞の仇を取らせていただきましょうか。」

「同胞？どの雑魚呪霊の事だ？」

ニヤニヤしてゐる猛に一直線に向かい、その丸太のような剛腕を振るつた。

即座に避けカウンターで顔面を殴りつける猛であつたが、触れた瞬間様子が変わった。

「ぐおおお……。貴様何をした？……」

「????」

殴りつけられた烏天狗は何もしていなかった。

烏天狗が何かしたのではない、烏天狗が取り込んでいた”両面宿儺の指”が反応したのだ。

頭を押さえて、悶える猛を他所に烏天狗はチャンスだと感じた。先程の一撃で圧倒的な力の差を感じたが、理由はわからないが隙だらけの猛を見てここぞとばかりに攻撃を仕掛ける。

「よくわかりませんが、この機を逃すわけにはいきません！」

『疾風天来』

ーキュイン！キュイン！

無数のかまいたちが、猛を襲い傷を付ける。まだまだと烏天狗は、剛腕で乱打を仕掛ける。

ードドドドドド！！

されるがままの猛は、初めて追い込まれる事となる。

「クソが……。頭が割れるように痛い……。」

（俺様が負ける？殺される？この程度の呪霊に？ありえない。この俺様は強さの頂点に

立つ男だ!!)

頭では否定するが、ボロボロにされていく猛。

「うおおお!!!」

「噂の加茂猛もここまでのようですね。息の根を止めさせていただー」。」

ズドン
!!!!!!

黒い光と共に打ち抜かれた、烏天狗の頭。

そして、無傷で拳を振り抜いている猛の姿があった。

――1秒前

頭が割れるほど痛かった猛は、己のプライド・力への渴望により急にスッキリとし、新たな術式を使用していた。

『反転術式』

先程までボロボロだった、身体は一瞬で完治していた。

そして、一瞬で烏天狗の後ろに移動した猛は、全力で拳を振り抜いた際に、打撃との

誤差0.000001秒以内に呪力が衝突した瞬間に発生するという『黒閃』も発動させていた。

”両面宿儺の指”の力によって、猛の力を引き出すきっかけとなっていたのだった。

また、『反転術式』『黒閃』の2つを同時に使用した事により、猛の力に大きな変化をもたらしていた。

「ケヒッ！ヒヒ！」

ゲラゲラゲラゲラ
!!!!!!

新たな自分の力の目覚めに歓喜し、笑いが止まらなくなっていた。

黒閃により呪力の核心を感じることで、呪力量の増加・術式の精度の向上。反転術式によりどの様な傷をも瞬時に治すことができるようになっていたのだった。

「これで、来年から入る呪術高专にて五条悟を叩きのめせることが出来る。」

烏天狗だったものから”両面宿儺の指”を回収し、帰還していくのだった。

第4話

呪術高専

日本に2校しかない呪術教育機関。東京校と京都校が存在する。今年は2人の大物が入学するとあつて、大変注目を浴びている。その中の1人、加茂猛は今年京都校ではなく東京校へ入学を決めていた。五条悟と同級生になる事で、組手という名の合法的な試合がいつでも出来ると考えての事だった。

16歳になり、猛は身体も大きく成長していた。身長187cm・体重80kg。まるで格闘家のような筋肉を纏い、金色の短髪で肉食獣のような赤い眼を持つている。黒を基調とした浴衣型の制服に赤い帯。所々に金の刺繍が入っている呪術高専の制服を身に纏い圧倒的な威圧感放っている。道ゆく誰もが目を合わせる事すら恐れていたが、呪術師から見れば、見た目の威圧感もそうだが、圧倒的な呪力量・鍛え抜かれたフィジカル・天才的な呪力操作、格闘技術。そして両面宿儺と同じと言われる術式が恐れられる理由である。

——呪術高专入学当日

「ここが今日から通う、呪術高专か。少しは俺様を楽しませてくれる学校生活になるんだろうな！」

嬉々として校舎に向かう、猛に向かってくる人物が1人。

「お前が加茂猛だな？」

「あ？誰だお前？気安く俺様に話しかけるんじゃないよ。」

「呪術高专一年担任、夜蛾正道だ！本日からお前の先生になるものだ。加茂よ、いま何時だ!？」

「お前が担任か！時間？13時くらいだが、問題あるのか？」

「入学初日から遅刻とはいい度胸だ！もう学校は始まっている！早く来い！」

入学初日だというのに、大幅に遅刻してきた猛に喝を入れつつ教室まで案内する夜蛾。問題児ばかりで少し不安になっていくのである。

「五条悟はもう到着しているんだろうな？」

「ああ、8分遅刻だったがな。」

「クツクツ。楽しみだ。奴はどのぐらい強くなっているのか。」
「ここがお前らがこれから学ぶ教室だ。一年は全部で4人だ。」

ーガラガラ

「先生おつせーよ。どんだけ待たせんだよ!」

「悟。落ち着きなよ。遅れてくる最後の1人にも事情があつたんだろう。」

「最後の1人はどんな奴なんだろ〜?」

教室には、これから猛と同級生となる3人が既に座っていた。

五條悟

六眼と無下限呪術を持つ、五條家の怪物。猛とは、幼少期に一度だけ戦った事があり、いつか倒さなければならぬと思っている。

夏油傑

降伏した呪霊を球状にしてから取り込み、自在に操る呪霊操術を持つ。午前中に出会ったばかりの悟と喧嘩し、互角の勝負を繰り広げた。

家入梢子

反転術式による傷の治療が出来る数少ない人物。一年生唯一の女性。

ーズズズズズ

「クツクツ。加茂猛だ！これからよろしく頼む。」

「加茂！呪力を抑えろ！」

猛の登場に驚愕した五条悟を尻目に、夏油・家入は猛の呪力に驚愕し止まっていた。

「お前!!こつちに入学したのか!?!」

「……………悟……………知り合いなのか?」

「ああ。ガキの頃、試合を一度だけした事がある。とんでもねー力を持っている……。」

「五条悟!!貴様と戦う為に東京校に来たのだ!!」

「……………。そこまで戦いたいつてのかよ!」

「夜蛾先生よ、早速戦わせろ!!全員の実力を確かめるべきではないのか!?!」

遅れてきたのに、自己中心的に仕切る猛に呆れつつも夜蛾は今後の話を進める。

「大幅に遅刻してきたお前が言うな！ まあいいだろう。この後、グラウンドにて模擬戦を行う！ ただし！ 殺傷能力の高い術式を使用する事を禁ずる！ 今から戦うのは敵ではなく、今後仲間となるものという事を肝に銘じろ。」

「あの一、私は戦えないのでパスで。」

「……。家人以外は準備をしてグラウンドに集合だ。」

ーグラウンド

この日を待ち侘びていた猛は歓喜していた。唯一互角に戦えると思っっている五条悟とようやく戦えるのだ。だが負けるつもりは毛頭ない。自分が最強であると自覚しているのだ。

「さあ、早速やろうか!! まずは誰と誰からやる?」

「ではまず、加茂と夏油がやってみろ!」

「五条ではないのか…まあいい、ウオーミングアップだ。」

「随分と舐められたものだね。確かに君はとんでもない呪力を持っているが、それだけ

で勝負はわからないよ。」

「ほう。では、楽しませてみる!!」

ーズズズ

何もない空間から5体の呪霊を呼び出し、先手を仕掛けたのは夏油だった。

「大口を叩くんだから、このくらい訳ないよね?」

「呪霊操術か、珍しい術式だが……弱い!!」

ーードドドド

「……え?……」

夏油が気づいた時には、呼び出した呪霊は倒されていた。余りのスピードとパワーに呆気に取られていた。

「もっと強い呪霊は呼べないのか?このままだと退屈で死んでしまうぞ?」

「くっ、言ってくれるね。ならばこの量はどうか!?」

夏油自身の呼び出せる呪霊の半分を呼び出した。おびただしい量の呪霊を見て、猛は笑っていた。

「クヒイ。この量を操れるか!優秀だな!だが……。」

ークイッ

ズババババババババ
!!!!!!!

「「はっ」」

その場にいた全員が驚愕した。猛が指先をクロスした瞬間に、とんでもない量の斬撃が飛び呪霊が次々と細切れになっていくのだ。

「それまで!!!勝者、加茂猛!!!」

「なっ!まだやれます!!!」

「これ以上はダメだ。本気になりすぎ怪我もしくは、死ぬ可能性がある!また、夏油もこれ以上手持ちの呪霊を減らす事はリスクになる。加茂との力の差を噛み締め、精進しろ!」

「クツ……。悟、後は頼みますよ。」

「まあ俺様には、通じないが良い線いつてるのではないか?俺様を楽しませるよう強くなれ!さて、次はようやく五条悟。貴様の番だ!!!」

「加茂猛!ぶっ潰してやるよ!」

「ようやくこの時がきた。さあやるぞ!!!」

——約10年待ち続けた戦いが切つて落とされる。

「何度も言うようだが、絶対に熱くなりすぎて殺傷能力の高い術式を使わないように！
では、始め!!」

まず仕掛けたのは悟であった。

―術式順転『蒼』

ゴリゴリゴリゴリ!!

「うおお!!」

ゴシヤ!!!

あつという間に収束に巻き込まれ、食らってしまふ。悟はこれだけでは終わらない。先程の夏油との戦いを見て、猛が想像の何倍も強くなっていると感じていたからだ。無下限呪術を活かした圧倒的なスピードでラッシュをかけていく。

ドドドド!!

だが、しかし猛は全ての攻撃に反応する!

(ウソだろ。このスピードに反応しついでこれるのか!?)

「いいぞお!!もつとだ!もつとやって見せろ!!」

時間にして、10秒。とんでもないスピードで行われてる攻防にも終わりがやってく

る。五条悟が殴り飛ばされるといふ形で。

ドン!!!

「なんだ……無限とやらを発生しつつ攻撃出来ないのか。」

「今はまだ練習中なんだ……よ!!!」

ーグイッ

グンツ!!ドギギヤ!ガシャーン!!

猛は後ろに吸い込まれるように吹き飛ばされていく。

だが、猛の鍛え抜かれた身体と呪力強化により効いていなかった。圧倒的攻撃力、防御力それに加えて再生能力まで持ち合わせているのだ。術式を使わずとも彼は強すぎたのだ。

ーゴキゴキッ

首を鳴らしながら瓦礫から出てくる、猛は昂っていた。

「さあ、次はこちらからいくぞ!無限とやらで死ぬ気で守ってみせろ!」

『解』

ーピッ

シユパパパ!!!

(グツ……。なんて威力!!ガキの頃食らったものとは桁が違う。)

悟は鼻血を出し、必死の形相で猛の攻撃を耐えていた。しかし、前回戦った時と違う事は、猛にはまだ余裕があった。

「ここまで耐えるやつは初めてだぞ!!さあ……どこまで持つかな?」

「そこまで!!!」

夜蛾は五条・加茂の両者の防御力の高さに、試合を止めあぐねていたが、五条の鼻血をみて危険だと感じ、止める事とした。

「あ……………!? 終わりだと?」

「勝者、加茂猛!!だが、加茂!熱くなりすぎて殺すつもりだったのか!!」

「ちっ。たしかに熱くなりすぎて本気を出しかけたな。まあ勝ちならいい。それにしても五条悟よ。10年で力に差がついてしまったな?」

「クツ……。俺だってまだ本気出してねえし!次回戦ったら俺が勝つ!!」

「フハハハハ!!!ならば次こそはもつと楽しませろ!!!悟、傑!!!」

猛は認めたのだった、悟と傑を強者として。いずれ自分にも届き得る存在になると信じて。無論、彼ら2人が成長しようと自分も更に強くなるので負ける気はないが。

そして最後に。

「家人！念の為、五条を治療しておいてくれ！」

「はあい。」

『反転術式』

「すげえ!!!」

「貴様も反転術式を使えたのか！梢子！後で回復力アップについて話すぞ!!」

「「貴様も?」」

「ああ。俺様も反転術式で回復することが出来る。だが、他者の治療は苦手なのだ。」

「まじかよ。あんだだけ防御力あって回復能力もあんのかよ。」

「話すのはいいいけど、ピューンってやってピョンピョンって感じじゃない?」

「言っている意味がわからんが。」

こうして、今年の呪術高专には逸材4名が入学したのである。

第5話

猛は高専へ入学し、満足な毎日を過ごしていた。

任務に出る。五条、夏油と組み手をする。家人と治療の勉強、実施をする。優秀な同期がいる事により、刺激的な日々を過ごす事により成長していた。

「てか、猛！お前っていつ休んでんだ!? 毎日毎日、暇さえあれば任務・組手・治療の勉強つて。身体どうなってるんだ? 頭おかしいのか?」

「悟。猛はもはや別の生物だよ。強くなる事以外に興味がないらしい。」

「貴様ら、好き勝手言いやがって。だが、たしかに今は強くなる事以外に興味はない。」

「ねえねえ、それってなんでなの? 正直言ってみんな強くはなりたいたいと思ってると思うけど、猛の場合異常だよ?」

いつもの教室で駄弁りながら、話している同級生4人。3人は猛の異常とも言える強さへの執念へ疑問を持っていた。

「知りたいのか…?」

「「知りたい!」」

「呪いだよ。呪い。」

「は？呪い？呪術って意味じゃねーよな？」

「ああ、俺様は実の父の力への渴望の賜物として産まれた！父と母は俺様を産んだ際に、死んだがな！その際に、呪いの王『両面宿儺』の力を受け継いで産まれた。父の執念により、母の中に薄く残っていた『両面宿儺』の血を呼び覚ましたのだ！

だから、俺様の術式は『両面宿儺』の斬撃と切断を受け継いでいる。もちろん肉体的な強さ、呪力量、格闘センスも受け継いでいるだろう。おそろくだがな……！」

「いやいや、その情報ってやばくねえか？両面宿儺と同じ力を宿してるかもしれない？親からの呪い？」

「……!?それって言って大丈夫なのかい？」

「問題ないだろう。もう俺様を殺せる奴は、この世にいるのかどうかもわからないしな。死んだ父の影響かはわからないが、力への渴望は強いな。まあ…今は宿儺への影響もある。」

「お父さんからの呪いかもつてのはわかったけど、宿儺が何の関係があるの？」

「考えてもみろ。呪いの王と呼ばれるほどのやつを力を受け継いでいるのだぞ！どこまで強くなるのか？宿儺を超えるほどの力を身につけてみたいと考えるだろう？」

3人は、猛の話の聞いて驚き納得をせざるを得なかった。

「だが、来週から一週間休みを頂き、実家へ帰らなければならん！」

「え？なんで？」

「悟ならわかるだろう？面倒な実家の都合だよ。」

「まあね……。加茂家も御三家だし、面倒ごとだろうね。」

「くつくつく。皮肉な事に現当主の親父は、正妻から相伝の術式を持った子供が産まれなくてな。側室から産まれた相伝の術式を持った子供を、次期当主候補として迎え入れるらしい！」

「猛が、加茂家の次期当主じゃないのかい？」

「保守派と仲の良い加茂家の中には、次期当主が保守派と仲良くできそうにないのを危惧している者も多い！そこで、次期当主候補として念の為に迎え入れるんだろう。権力を取り上げれば問題ないと考えているだろうが、気に食わなければ、力で振じ伏せるがな。」

「そ、そうか。」

「ふうん。御三家つてのもめんどくさいんだね。」

「まあね。てか、京都の甘いお菓子のお土産よろしく！」

「ああ、その代わり帰ってきたら組手だ。」

3人は初めて聞く加茂家の話、猛自身の話を聞いて複雑な気持ちになりつつ送り出した。

――なんでみんな母様をいじめるのですか？

――爛れた側女だからよ。

――母様どちらに行かれるのですか!?

――私が居ると憲紀の邪魔になるから。

加茂憲紀は加茂家次期当主候補として、迎え入れられた。

――母様の為にも、次期加茂家当主候補として精進しなければ。

憲紀は、加茂家に異質な存在がいると聞かされていた。彼の存在を聞くと恐れる者、敬愛している者の2択に分かれていた。

だが、全ての人が声を揃えていうのは「あの方は強すぎる。」

この日、憲紀は初めて会う事となる。とんでもない怪物に。

猛が高専から帰ってくるにあつて、加茂家は慌ただしくしていた。

「猛様が帰って来られる！皆様、粗相のないように！」

憲紀は不気味に思えた、母を虐めていた者達が非常に怯えている姿。いつも凜とし強い家族達が慌ただしくしている姿を見て。

（どんな人が帰ってくるのだろう。たしか猛様だったよね。）
ゆつくりと加茂家の大きな門が開く。

「お帰りなさいませ！猛様!!」

「ああ、今帰った。親父は何処だ？」

「当主様は、奥の部屋にいらっしやいます。こちらへ。」

———

「猛！帰ったか！高専はどうだ？」

「只今帰った。東京校に行つて正解だった！五条悟以外にも逸材の者たちが揃っている。」

「そうか、それは良かった。そんな事より、俺様に話があるんだろう？」

「ああ、次期当主候補として憲紀を迎え入れる事になった。憲紀入りなさい！」

「はい！失礼致します。初めまして。加茂憲紀と申します。よろしくお願ひします！」

憲紀は緊張しながらも、挨拶を済ませた瞬間に今まで感じたことのない、震え上がるほどの呪力を感じた。

ーズズズズ

「貴様が憲紀か。俺様が猛だ！次期当主候補なんだってなあ？俺様もだ！」

呪力を少し解放し、獐猛な笑みを浮かべる猛が仁王立ちしていた。

「猛!!呪力を抑えろ!!憲紀が怯えておるだろ!!」

「くつくつく！冗談だよ。ふざけただけだろ。」

ーガチガチガチ

憲紀は震えが止まらなかった。幼いながらも本能で感じ取った、この人は別格だと。逆らってはダメだと。

その後の話は何も頭に入ってこなかった。

憲紀にとって、猛という未知の生物と過ごす1週間というのは緊張と恐怖でいっぱいであった。

「おい！皆を集めろ。訓練をするぞ！」

「はっ！」

「――」

「集まったな。これより訓練を行う！まずは、全員で俺様に攻撃をしろ。反撃はしないから安心しろ。防御・再生・回避を訓練させてもらう。」

「はっ!!」

「それでは始め!!」

そこからは圧巻だった。回避に徹すれば、全く当たらない。もはや速すぎて見えていない者がほぼいない様だった。回避に飽きたと思えば、50名近くの攻撃を全て受けきっていた。生半可な力では傷一つ付かず、傷が付いたとしても一瞬で再生し、回復していた。

――2時間程度続け、猛は息一つ乱してなかったが、終了となった。

憲紀は、恐怖や緊張などとうに忘れ羨望の眼差しで見つめ、気が付けばあんなに恐れていた猛に話しかけていた。

「猛様！どうやったらそんなに強くなれるのですか!?!」

「ああ？俺様みたくなれるわけないだろ？才能だ。まあ俺様に近づきたければ死ぬほど鍛える事だな。」

「わかりました!!死ぬほど努力して強くなり、当主になります!!」

「ふははははは!!!それがどうゆう意味か分かっていつているのか？まだガキだから理解しきれてないかもしれないが、貴様も当主にならない理由があるのだろうか？」

「母様の為に、当主にならないけません。」

「ほう。では、俺様を楽しませるぐらい強くなってみせろ。誰も文句が言えぬほどにな！」

「はい!!」

憲紀は心に誓った。誰もが認める強さを手に入れ、加茂家当主になり母様を迎えに行くと。

——

「で？親父。いまさら俺様を危惧し始めたのか？」

「猛よ。お前は強くなりすぎている。そう、お前一人で加茂家を滅ぼせるほどにな。」

「俺様を加茂家から追い出すつもりか？保守派が黙ってないってか？」

「そこまではまだ考えておらん！少なくとも俺はな。だが、保守派の人間は危惧しているとだけ言っておく。」

「そうか。保守派の人間に伝えてくれ。貴様らが懸けている俺様への暗殺の懸賞金が低すぎるとな！もつと強い呪詛師を寄越せと。」

「気付いていたのか。」

「あれだけ呪詛師が襲ってくればな。権力が好きな一族っていうのはどうも面倒だな。五条家の悟に対抗できるのは俺様だけだつてわかつてないのかね。」

「それ以上にお前が宿讎の様にならないのか恐れているのかもな。」

「憲紀が新たな決意を心に決めた裏では、猛は加茂家の実態に苛ついていたのであった。」